

*Free Fall* 小論

—テーマと語り的手法における二項対立の2つの要素—

高本 孝子

The Thematic and Narrative Conflicts in *Free Fall*

Takako Takamoto

There are thematic and narrative conflicts in William Golding's *Free Fall*. The thematic conflict is that though this novel is based on the premise that complete free will is possible in human beings up to a certain point in life, one finds that, from his infancy onward, the protagonist Sammy Mountjoy is obsessed with the idea of sharing the identity of the one he loves. Sammy's conduct is, whether he is aware or not, largely controlled by this obsession, which is derived from his ignorance of his father's identity. One can conclude from this that psychological determinism is working in Sammy's life in this sense: Sammy is not completely free at the outset.

The conflict in narrative technique is that two modes of narration are adopted in this novel: first, a realistic mode, and later an allegorical mode. The story of Sammy's seduction of Beatrice Ifor is related realistically, while Sammy's enlightenment is achieved through an experience which should be interpreted allegorically. Moreover, the characterization of Beatrice is two-fold. Her limitations as a Catholic girl from the lower middle class, such as sexual inhibition, are realistically dramatized through various episodes, whereas her moral goodness is described in an allegorical mode, such as the heavenly light from her brow.

The presence of these two conflicts makes this novel not only complicated but also elusive in its meaning.

William Golding の第4作 *Free Fall* (1959) は難解ではあるにせよ、テーマそのものは比較的はっきりとうちだされた作品であり、そのテーマとは、いつどのようにして人間が自由意思を失うかということである。主人公 Samuel (Sammy) Mountjoy は 'the psychic-spiritual-mystical realm' と 'the rational-physical-empirical world'<sup>1)</sup> の間で

揺れ動くが、青春時代のある一時点において前者の世界観を捨て、後者の世界観を選ぶ。サミーはその選択に従って性の快楽を追求しようと決心し、同時に自由意思を失い、強迫観念のとりこになってしまう。つまり、この作品のテーマは、'innocence' を持ち続ける限り人は体の自由は束縛されても自由意思は持ち続けることができるが、2つ

の世界観のうちエゴイズムを満足させるためどちらか一方のみに隷属するときに人は自由を失うということである。そのためゴールディングは、サミーが自由を失う過程、そしてスピリチュアルな世界の存在を再認識するに至るまでの過程を劇化して見せた。しかしながら、このようにテーマがはっきりしているにもかかわらず、この作品の読後感あまり菌切れのいいものではなく、テーマそのものが心の底に響いてこないという一種の消化不良の感じを読者に与えるのである。この作品が他の作品に比べると不評なのはそのあたりに由来するように思われるが、筆者はその原因を、この作品における二項対立的な2つの要素の存在にあると考える。よって本稿ではその二項対立的な要素について検討したい。

## 1

作品全体を通じてサミーは完全に自由かそれとも強迫観念のとりこであるか、この二つのうちどちらかの状態にあるとして捉えられている。彼の強迫観念とは片想いの少女 Beatrice Ifor の体を所有することに対してであった。作者はサミーが自由意思を放棄し強迫観念のとりこになる決定的瞬間を、彼がグラマー・スクール卒業直後に森の中を散歩していたある時点に設定している。そこでまず、彼の強迫観念がどのようなものであったかについて詳しく検討してみたい。ピアトリスに対するサミーの愛情が強迫観念的なものであることは次の引用に明らかであろう。

Once a human being has lost freedom there is no end to the coils of cruelty. I must I must I must. …… The obsession drove me at her.<sup>2)</sup>

この強迫観念が彼女の体を所有することに対してであることは先に述べたが、それは彼にとってピアトリスと一体化したい、所有したい、本質を発見したいという強迫観念に等しいものであった。そのことは、たとえばピアトリスに対する彼の次の言葉に表われている。

"I said I loved you. Oh God, don't you know what that means? I want you, I want all of you, not just cold kisses and walks—I want to be with you and in you and on you and round you—I want fusion and identity—I want to understand and be understood—oh God, Beatrice, Beatrice I love you—I want to be you!" (p.105)

いささか常軌を逸しているのではないかと思われるほどの感情の激しさがここには見られる。サミーのこの強迫観念がどこから生じてきているかについて、筆者は次の彼の語りの中に重要な手がかりがあると考える。

"Beatrice."

"Mm?"

"What is it like to be you?"

A sensible question; and asked out of my admiration for Evie and Ma, out of my adolescent fantasies, out of my painful obsession with discovery and identification. An impossible question. (イタリックは筆者) (p.103)

上の語りからわかるように、彼の強迫症的な情熱が「Evie と母に対する賞賛の念から生じている」というサミーの言葉は、重大な意味を持っていると思われる。エヴィというのは、幼年時代にサミーが Rotten Row というロンドン郊外のスラム街に住んでいたとき近所に住んでいた女の子のことである。このロットン・ローについては、たとえば Mark Kinkead-Weekes と Ian Gregor がこれをエデンの園にたとえているのをはじめとして、<sup>3)</sup> おおかたの批評家はここでの幼年時代を肯定的に捉えている。そして、幼なじみのエヴィへの憧れや、2階の間借り人の死など、幼年時代にまつわるとりよめのない種々雑多のエピソードについては作品のテーマとは直接関係ないとみなされ、看過されることが多く、これらのエピソードを作品全体のテーマと結びつけて考えている批評家は筆者の知る限りほとんどいない。<sup>4)</sup> サミー自身これらのエピソードを書き留めることについてはただ「僕がこれらの情景を描くのはそれらが重要に思われるからだ。それらは僕の物語の主筋に関わる場所はごく少ないのである」("I describe them because they seem to be important. They contributed very little to the straight line of my story.") (p.46) と述べているだけである。

しかし、筆者はこの一見脈絡のないエピソードの寄せ集めに後年のサミーの生き方を決定づける重要な要因が隠れていると考える。特に、サミーが幼なじみのエヴィーに対して抱いていた感情は注意に値する。というのも、エヴィーは彼にとってただの幼なじみの女の子ではなく、自分が常に「半分しか理解できないまま舗道に立っていた」(p.28) のに対し、「いつも事の核心にいて」(p.24) 「究極知」(p.29) の所有を許されている特別な人間だったからである。そのことは、彼の家の間借り人が死んだときに、

彼は許されず、エヴィーだけがその死に顔の白鳥の羽のように白い口ひげに触ることを許されたことによって決定的な事実となった。死人の口ひげに触るということは、彼にとって単に好奇心を満たすというだけのことではなく、死の本質、ひいては生の本質そのものに触れることだったのである。<sup>5)</sup>そして、それを許されなかったサミーは生の秘密から常に隔てられているという疎外感を持つことになったのである。

And the shape of life loomed that I was insufficient for our lodger's thatch, for that swan-white seal of ultimate knowing. (p.29)

エヴィーが事の核心にいつも参入できるのは、彼女が女の子だから可能なのだとサミーは思い込む。ときどき男の子に変身するのよ、という彼女の打ち明け話はサミーには耐え難いものであった。彼は自分こそ女の子になりたかったほどなのである。<sup>6)</sup>

ところで、間借り人の口ひげに触るということに象徴されるように、生や死の本質を究めるということになぜサミーが子供心にもこれほど執着したのかについては彼は何の説明も与えていない。しかしながら、再び彼の幼年時代についての回想の中の彼の出生についての部分を見た場合、彼が私生児で父親がどこの誰とも分からないということは、愛する対象と同一化したいという彼の強迫観念と深い関係があることが推測できる。自分の父親がどんな人間なのか全く分からないということが、彼が自分のアイデンティティ、特に男としてのアイデンティティを確立していく上で大きな不安定の要素をもたらしたであろうことは想像に難くないからだ。現に彼は幼い頃、父親がどんな職業の人だったかについて母親に再三再四尋ねているし、また、大人になってからもあれこれと想像を巡らしている。このことから見ても未知の父親に対する彼の関心はかなり深いことが窺える。<sup>7)</sup>

これまでの分析で、サミーは生い立ちに端を発するところの、生と死の本質を究めたい、そしてそのために愛する者と同一化したいという強迫観念じみた衝動を持っていることが明らかになった。サミーがエヴィーに対して抱いていた感情が、彼の成長に伴いそのままピアトリスに対して引き継がれていったこと、すなわち、エヴィーとピアトリスに対するサミーの感情が根本的に同質のものであることは今や明らかであろう。成長した彼はもはやエヴィーの話がすべて真実だったとは信じていない。エヴィーは「嘘つき」であり、錠の中に彼女のおじさんがいるはずがないと

分かっているのである。しかし、それでもなお、彼は無意識のうちに生の秘密を持った人間を探し求め、その人間と同一化することによって生の秘密を探り出そうとする。彼は「発見者」(p.86)なのである。そして、エヴィーの時に叶えられなかった同一化の夢がピアトリスによって叶えられるのではないかと思うのである。彼がピアトリスと性交渉を持つことにあれ程までに執着したのは、彼自身が思い込んでいるように、単に彼が快楽主義者だったからではない。ピアトリスと一体化することにより、「成功した共有、融合、秘密の看破、僕の生を謎に満ちた神聖な彼女の生のレヴェルに高めること」(p.123)が可能だと思ったからである。すなわち、彼女の体の秘密を知ることが、彼女の本質をつかみ取ることだと思い込んでいたからである。<sup>8)</sup>それが誤った期待であることは明白である。しかし、そのことに気づかないサミーは、ピアトリスと性交渉を持ちさえすればすべての秘密が明らかになるかの錯覚を持ち、「僕をその秘密のうちに参入させておくれ」(p.103)とピアトリスに懇願しながら、性交渉を持つことに対してなつかば狂気じみた強迫観念にとり憑かれることになったのである。

このように、ピアトリスに対する強迫観念じみた愛情が彼の生い立ちや幼年時代にその根源を持つならば、作品そのものは自由意思による選択の結果の墮落をテーマとしているものの、実際には主人公の「自由意思」には初めから制限が加えられていたことになる。すると、作者自身の意図はともかく、作品そのものは結果として心理学的な意味での決定論を支持することになる。すなわち、サミーが一体化の欲求を満足させるためにピアトリスを誘惑し、破壊させてしまうことは、無意識の領域において、幼年期からすでに彼に課せられたいわば宿命であったとも考えられるのである。したがって、この作品が提示しているはずの自由意思対決定論の構図がぼやかされた形となってしまふ。つまり、ここにおいて、完全な自由意思の所有が存在し得るといふ、この作品が前提としている考え方そのものが、心理学的決定論の要素を取り入れることにより部分的に否定されてしまっているのである。作者の意図としては、作品のすべてのエピソードを有機的に関連づけるつもりだったのだらうと思われるが、結果としては作品のテーマを訴える力を減じることになってしまっている。

## 2

「自由な墮落」に見られるもう1つの相反する2つの要

素とはアレゴリーとリアリズムの2つの様式の対立である。それは2つの局面に見られる。1つはピアトリスの人物造形においてであり、また、もう1つはプロットそのものにおいてである。まず、ピアトリスの人物造形について考察したい。「自由な顔落」のピアトリスは、下敷きとなっているダンテの「神曲」のピアトリーチェと同様、清純と無垢の象徴と言えるべき存在であり、リアリスティックと言うよりはむしろアレゴリカルな人物像である。ピアトリスの真価は道徳的な善良さにある。サミーはスピリチュアルな世界の存在を認識したときに“empty”だと思っていたピアトリスの心が実は“full”であることに気づく。「彼女は素朴で愛情深く、寛大で謙虚だった。」(p.191)彼女の善良さは、額に現われた「天の光」(“that light of heaven”) (p.222)などに象徴的に表わされている。また、サミーの描いた彼女の肖像画に「捕らえられるべき恐怖があったはずなのにそれがなかった」ことなどに表わされている。

It was after the last and particularly degrading step of her exploitation; and in my self-contempt I added the electric light—shades of Guernica to catch the terror, but there was not. The electric light that ought to sear like a public prostitution seems an irrelevance. There is gold, rather, scattered from the window. (p.124)

しかしながら、ここで注意すべきなのは、彼女の善良さがそういった抽象的な形でしか読者に伝えられないということである。彼女の善良さは具体的なエピソードによってではなく、まだ無垢を失っていなかった時点でのサミーの芸術家としての感性を通じて「額の天の光」という形でしか捉えられない。

一方で、ピアトリスにはリアリズム小説の登場人物としての人物造形も与えられている。すなわち、彼女はダンテのピアトリーチェとは異なり、単に道徳的善良さを象徴的に表わすだけの存在ではなく、いわゆる‘round character’として、彼女の置かれた社会的環境、とりわけ、女性解放運動の洗札を受けていない、「第二の性」的立場を何の疑いもなく受け入れているという、女性としての彼女の限界などが丁寧に書き込まれている。たとえば彼女は下層中流階級のカトリック教徒の家の出身であり、そういった家庭環境のため「生焼けの宗派心」(‘half-baked sectarianism’) (p.120)を持っていること、結婚までは処女であるべきであり、自分の性欲を認めてはいけないという思いこみに

とらわれていることなどがサミーの語りを通じて我々に知らされる。また、彼女にはウィットもなく、サミーへの手紙に書くことは何色のスーツを買おうかなどのことである。彼女はひとたび結婚が決まると「劣った人間」(‘inferior’) (p.119)になりさろうとする、典型的な「家庭の天使」タイプの女性である。サミーがいらいらしながら部屋の中を歩き回っている間、彼女が「犬のような目」(p.121)で、その姿をおどおどしながら見守っている様子が語られる。これらがすべて語り手のサミーの偏った見方であることを考慮に入れても、ピアトリスの人物像は魅力あるものとは言えない。特に、後にサミーの妻となる Taffy と比べた場合、ピアトリスの人間としての面白味の無さは一層際立ったものとなる。タフィーとピアトリスの違いはたとえば顔立ちの描写などにははっきりと表わされている。ピアトリスの顔はサミーの見方によって美しくも醜くもなり、しかも、サミーは彼女の顔を描くことができない。これに対してタフィーの顔立ちがサミーによってはっきりと描写されており、独立した人格を持った女性であることを感じさせる。タフィーがピアトリスと対照的な女性として描かれていることは明白であり、ピアトリスの顔をサミーが描けないということは、作者のもとの意図からすれば、サミーがピアトリスの顔に輝く天の光を認識できずにいることを示しているのだが、タフィーの個性を前面に出した顔立ちの描写を読むと、ピアトリスのアイデンティティの欠如を対照的に表わしているとしか受け取れなくなる。だとすると、ピアトリスがサミーの話しかけるのに対していつも「たぶん」(‘maybe’)としか答えないことを彼女の‘clear absence of being’によるものだとする若き日のサミーの感想はあながち的を外れてはいないことになる。つまり、出来事のレベルだけで言うと、サミーがピアトリスを捨てるのは無理からぬことであり、当然の成りゆきという感じすら与えるのである。

さらに不十分に感じられるのは、暗闇の洗札を受けた後のサミーがピアトリスの真価を認識するところである。‘full’という言葉によって彼女の善性を初めて真に認識したということを表わしていることはわかるのだが、どういふ点をどのように認識できたのかということについて読者を納得させるものとは言い難い。なぜなら、ピアトリスの善性はただ「素朴で愛情深く寛大で謙虚」という抽象的な語句で説明されるのみで、先ほど具体例により説明された彼女の「退屈さ」に比べると明らかに説得力に欠けるからである。さらに言えば、ピアトリスの本質を正しく認識できなかったことにサミーの罪があったとするなら、彼を正

しく理解できず、「将来の夫」の役目を彼に振り当てることで事足りりとしていたピアトリスにもそれなりの責任はあったと言えるのではないかと考えられる。果たしてサミーだけの「罪」と言えるのだろうか。この点において、サミーの物語は読者に、彼を断罪しようとする気持ちを減じてしまうのである。もしも、このような理屈づけもまた、ゴールディングが糾弾しているところの、合理主義による己のエゴイズムの正当化（たとえば Kenneth 医師がピアトリスの発狂を、「合理主義」的な説明によってサミーの責任をのがれさせてやろうとしたように）の中に含まれるとするならば、一般の読者は少々窮屈に感ずるのではないだろうか。

このような窮屈な感じは、読者がサミーとピアトリスの恋愛を考える場合に、彼らを単に道徳的側面からだけではなく、それぞれ1人の社会的人間としての側面からも捉えていることから生じていると考えられる。ではなぜそういう捉え方をすることになるかという点、彼らの恋愛の成りゆきがかきわめて具体的な社会的コンテキストの中で語られるからである。言い換えれば、19世紀的リアリズム小説の枠組みの中で語られていると言えよう。こういった枠組みの中では読者は自ずと各々の登場人物の道徳的だけでなく、社会的責任についても考えを及ぼさざるを得ないのであり、その場合ピアトリスだけを簡単に無罪放免するわけにはいなくなるのである。

これと対照的なのが、独房での場面である。ドイツ軍の捕虜収容所に入れられたサミーは、脱走の首謀者を白状すべく、心理学者の Dr. Halde に拷問を加えられる。その拷問とは、肉体に苦痛を与えるのではなく、ただ真っ暗な部屋に閉じこめるだけという心理的な拷問であった。この場面は一見非常にリアリスティックな印象を与える。真っ暗な小部屋に放り込まれたサミーの心理の移り変わり、部屋の真ん中に切断されたベニスが置いてあると思ひこむまでの過程が、それこそ秒単位で究明に跡づけられる。そして、これにサミーの生理的反応も加えて描写されているので、いっそうリアリスティックな印象を読者に与えるのである。しかしながら、注意しなければならないのは、このリアリズムはいわば「意識の流れ」的手法、すなわち20世紀的リアリズムとでも言うべきものであり、サミーがピアトリスを誘惑して捨てるまでの話の枠組みとなった19世紀的リアリズムとは異質のものだということである。そもそも「暗闇」そのものが、ゴールディングの他の作品群においてと同様、この独房にあっては単に物理的に光が欠如しているという状態を指すのではないことは明らかである。サ

ミーにとって「暗闇はさまざまな形に満ちていた」(p. 174) のであり、彼は暗闇の中に己の心の暗闇を投影させるのである。今や独房の暗闇はサミーの心の暗闇となり、彼はその真ん中に恐怖の集約物があると信じ込み、濡れ雑巾を切断されたベニスだと思ひ込む。その思い込みは彼の心の悪の正体が隠されており、「彼が仕える神が己の性欲であることを示している」という S. J. Boyd の意見は十分に的を射ている。<sup>9)</sup> サミーは己の心の内面のおぞましさを実感する。そして己の罪を深く自覚した彼は慈悲を乞いながら我知らず絶叫する。それはこの世に絶対的な善と悪が存在することを認める叫びであった。この叫びにより、成長とともに失ってしまった、スピリチュアルな世界を見る力を再び与えられたサミーは、今こそピアトリスの道徳的善良さとその価値をはっきり認識するのである。

上に述べたことからわかるように、作者の意図は明確であり、誤解の余地を許さないのであるが、問題はこの「暗闇の洗礼」が、それまでの19世紀的リアリズムの枠組みから全く外れたところで行われることである。先ほども述べたように、小部屋の闇はアレゴリカルなものとして捉えられている。従って、私たち読者は19世紀的リアリズム小説としての読み方から、アレゴリーとしての読み方へと移行しなければならない。そうしなければ、ピアトリスの善良さをサミーとともに「真に」認識することができなくなるからだ。しかし、これは読者にとってあまりに負担が大きすぎると言えないだろうか。せめて、暗闇がアレゴリカルなものとして捉えられるべきであることを読者に前もって知らせておくべきではないだろうか。「暗闇の洗礼」のエピソードの中に牧師館での子ども時代の思い出話が挿入されているが、Virginia Tiger も指摘しているように、このエピソードはその冒頭の「なぜ暗闇をこわがるようになったか」という問いかけに答えるものではない。<sup>10)</sup> そして、暗闇が主人公にとって心の中の間を象徴的に表わすものであることはどこにも暗示されない。むしろ、作品全体から見た場合、このエピソードは子ども時代と思春期とのつなぎ的な役割以上は果たしていないように思われる。

「暗闇の洗礼」がいかに抽象的なレベルにとどまっているかは、サミーがその直後に啓示を受けた次の場面を見ても明らかである。

Standing between the understood huts, among jewels and music, I was visited by a flake of fire, miraculous and pentecostal; and fire transmuted me, once and for ever. (p. 188)

S. J. Boydはこの暗闇の場面がGeorge Orwellの*Nineteen Eighty-Four*におけるWinstonの拷問の場面を想起させると述べているが、<sup>11)</sup> 拷問室で自分が一番恐れているネズミの群にまさに襲われようとする寸前にウィンストンが「俺ではなく彼女にやってくれ!」と叫び、そのことによって己のエゴイズムの醜さを思い知らされる、あの強烈さと比べてみれば、この場面がいかに抽象的なものであるかが分かるだろう。

以上のことから明らかなように、「自由な顛落」においては読者は「暗闇の洗礼」を境としてリアリズム小説としての読み方とアレゴリーとしての読み方の二つの間で往き来しなければならなくなる。この後のピアトリスの‘fullness’に対する認識も抽象的なレベルにとどまっております。読者にはピアトリスについて具体的には何の発見もない。ゴールディングはサミーのピアトリスを誘惑し、捨てたという話を、事実を述べるだけでなく、「誘惑」とか「搾取」などの価値判断を含む言葉をふんだんに用いることによって、サミーがピアトリスに対して犯した罪の重みを読者に認識させようとしているが、この工夫はあまり成功しているとは言えない。先ほども述べたように、リアリズム小説のレベルではサミーがピアトリスを捨てることはある程度やむを得ないことであるという印象を読者に与えてしまうからだ。

よって、サミーとピアトリスの話はリアリズムの枠組みをも備えており、また、いわゆる「よくある話」であるがゆえに、作者がこの話に負わせたかった道徳的メッセージを担うには安っぽいという感じを与える。それはちょうど、D. H. Lawrenceの*Lady Chatterley's Lover*において、人類の救済をMellorsとConnieのセックスに暗示させるといふ作者の意図が読者にとってはアンバランスな感じを与えるだけであると同様であろう。つまり、資本主義や科学技術の発達に伴って人間に課された20世紀社会の非人間的な状況に対し、男と女のセックスという、最も原始的な人間同士の絆を対抗させようというのがロレンスの創作意図だったというのは理解できるのだが、読者から見ると、いかに象徴的な意味を負わせても、オーガズムを通じてコニーが達成し得た生の充実感、人間と人間の絆の実感だけでは社会的な規模の悪に対抗するにはいささか役不足だという印象を免れ得ないのである。そして、「自由な顛落」は同様の印象を読者に与える。つまり、1人の男が1人の女を誘惑して捨てたという話に精神世界からはじき出された現代の人間の悲劇的な状況を象徴的に表わそうとしても、どこか不自然な作者の作為を感じてしまうのである。

以上論じてきたように、リアリズム小説の枠組みだけで「自由な顛落」を捉えてしまったら、ピアトリスの真価は決して認識され得ない。よって、異なったレベルでの読みが読者に要求されている。また一方で暗闇の洗礼も、単なる暗闇の恐怖として捉えてしまったら、その意義は見失われてしまう。従って、この拷問の場面あたりから小説は突然アレゴリカルなレベルへと移行することになるのである。そして、リアリズムの様式とアレゴリーの様式の混在は、この作品に一貫性を欠落させる結果となってしまっている。

「自由な顛落」は、現実社会とは隔絶された状況に主人公を置いた、寓話的な要素がきわめて強い前3作の*Lord of the Flies*, *The Inheritors*, *Pincher Martin*と異なり、ゴールディングが初めて20世紀のイギリス社会という社会的コンテキストにおける人間関係を軸として道徳的テーマを追求した作品であるが、寓話にもリアリズムにも徹しきれなかったためのあいまいさが結果として読者に訴える力を弱めることになってしまった。そしてこのことは、完全な自由意思の存在を認めるという考え方や決定論的な考え方の混在とあいまって、この作品を単に難解なだけでなく、テーマがはっきりと打ち出されているにもかかわらず捕らえどころのないものとしてしまっているのである。

## 注

- 1) L. L. Dickson, *The Modern Allegories of William Golding* (Florida: Univ. of South Florida Press, 1990), pp. 63-4.
- 2) William Golding, *Free Fall* (London: Faber and Faber, 1959), p. 115. 以下、同書からの引用はすべて本文中にページ数を記載する。なお、日本語訳については小川和夫訳「自由な顛落」(東京:中央公論社, 1983)を参考にさせていただいた。
- 3) Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding* (London: Faber and Faber, 1969), p. 171.
- 4) 筆者の知る限りでは、唯一 Inger Aarseth だけは、*Free Fall* を神話のパターンに基づいた作品だと考え、幼年時代をも含めたサミーの成長の課程を統一的なヴィジョンで捉えようとしている。Inger Aarseth, "Golding's Journey to Hell: An Examination of Prefigurations and Archetypal Pattern in *Free Fall*," in *English Studies*, Vol. 54, No. 4 (Aug 1959), pp. 322-33.
- 5) この間借り人の死体がサミーにとって死そのものの表

象となったことは、独房の真ん中に彼の死体があるのではないかという妄想にとり憑かれることから分かる。

- 6) 女の子になりたいという彼の望みは思春期になっても変わらない。(cf. p.181)
- 7) もっともサミー自身は父親がどんな人だったかについて「たいした好奇心もなかった」と書いているが(pp.10-11)、その後続く父親についての彼のさまざまな憶測を読むと、自分では意識していないが、彼がかなり深い関心を持っていることが分かる。このことから見ても語り手のサミーが作者とは重なりあわないことが分かる。
- 8) Kinkead-Weekes and Gregor, p. 177.
- 9) S. J. Boyd, *Novels of William Golding* (New York: St. Martin's Press, 1988), pp. 76-77.
- 10) Virginia Tiger, *William Golding—The Dark Fields of Discovery* (London: Calder & Boyars, 1974), p. 159.
- 11) S. J. Boyd, p. 76.